

平成 16 年 7 月 29 日

<4953 佐々木 朗>

参考文献の内容から

1. 子どもの文化人類学 原ひろ子 晶文社 1979 年

著者は 1961 年から 1963 年にかけて延べ 11 か月の間、カナダの北西部に住むヘヤー・インディアンという狩猟採集民と生活を共にした。

丸太小屋のかたわらの人気のないところで、4歳4か月の女の子が小さい斧を振り上げて、短い丸太を割ろうとしていた。斧が振り下ろされると丸太は見事に 2 つに割れた。また、ストーブに興味を示し始めると、熱くなりかけたストーブに幼児をわざとさわらせる。肌が少し水ぶくれになることもあるが、子どもはストーブを避けて身体を動かすようになる。ナイフなども、子どもの方でいじりだすと、大人は、だまって見守っている。

このようにヘヤーの大人達は、危ないと教えることよりも、子どもが早く自分でナイフを使いこなすようになることを重視している。彼らは、子どもの時から、自分個人の責任において判断し、行動するといった点で、極端なほど徹底している民族である。

また、彼らの親子のつながりは淡白である。親には親の運命が、子には子の運命があると思っ

ているので、子どもは自分自身で運命を弾きリウいていくものだと考えている。こういった前提があるのか、ヘヤー・インディアン族は、「自分で生んだ子どもは自分で育てるのが当然」という考えをもっていない。そのため、生後間もない赤ん坊に限らず 15 歳ぐらいまでの子どもが養子に出されることもしょっちゅうである。おもしろいことに、養子に出された子どもは、すべて自分の本当の父母を知っていることである。



林から拾ってきた乾いた木片を、切り出しナイフで削って、玩具のカヌーを作っている7歳の男の子



斧をふりあげてストーブ用の焚き木を割る 11 歳の男の子

ヘヤー・インディアンの生活は「はたらく」、「あそぶ」、「やすむ」の3つに分類されている。「はたらく」とは狩猟、焚き木の狩り出し、毛皮のなめしなどであり、「あそぶ」とは、同じキャンプ地の仲間でのおしゃべりやちょっとした賭け事、ポーカーなどであり、「やすむ」とは「はたらく」合間や「あそぶ」合間である。狩の途中に突

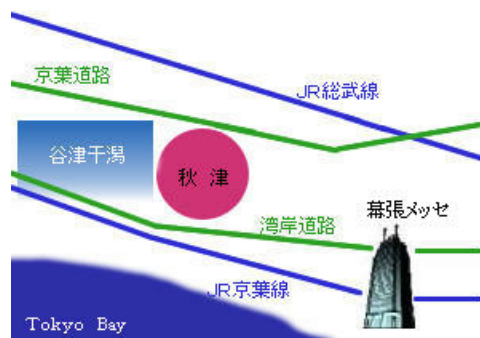
子どもの社会力をどう育てるか

然前を歩いている人が急に立ち止まることがあるが、それは「やすむ」であり、彼らは自分の守護霊と交信しているものであり、決して周りの者がそれをじゃまするようなことはない。ポーカーの途中で突然テントのすみに横になることがあるが、それも「やすむ」のであり、「誰も文句を言うことはない。かれらにとって育児はどのカテゴリーに入るのだろうか。答えは「あそぶ」である。彼らは、老若男女を問わず、楽しんで子どもを育てているのである。彼らは、赤ん坊に対しても「一個の独立した人格」として接し、子供の運命や将来は、その子自信で切り開いていくものであって、育て方によってその子の将来が決まるのだという考えを市内から気楽なものなのである。子育ては、女のみならず、男も、5、6歳の子ども達も自分より小さい子をよく観察し、面倒をみる。子どもに「してやる」というよりも、「自分が子どもに楽しませてもらっている。」という気持ちが強いようである。

ヘヤー・インディアンの子も6歳ぐらいになるとナイフやキリなどの道具を使って木片でおもちゃを作るようになる。また、はぎれをはさみで裁断して人形や布くつを縫う子どもでてる。子どもにとっても「よい仕事」をしようとする気持ちがたいへん強く、おとなやまわりの子どもたちの批評にもとても敏感である。彼らの間では、仕事にせよ遊びにせよ、大人の世界と子どもの世界がはっきり分けられていないのである。だから、子ども達は誇りをもって、カヌーの模型を作り、ムースの川を縫い合わせる「仕事」をしているわけである。

2. 学校を基地にお父さんのまちづくり 岸祐司 太郎次郎社 2000年

1980年に東京湾の埋立地に誕生した千葉県立習志野市立秋津小学校が開校した。そこには新天地を求めて全国から人が集まってきた。最初は人々の付き合い方も空々しく感じられたが、「秋津の伝統を主体的に創り上げるひとりの私」が現れはじめた。学校前の横断歩道の信号機の前に立ち、朝夕の登下校時にじゃんけんをしながら、子ども達の飛び出しを防ぐ指導をしたおじいちゃん、校庭中に花の種をまき育てるお花のおばあちゃん。かれらを秋津の住民は「秋津の偉大なる先輩」として地域の記憶として



鳥小屋作りで、お父さん方を中心に地域のコミュニティー作りの構想が盛り上がった。

語り継ぎながら、地域コミュニティーを形成していった。

著者がPTA会長を務めていた1991年に、PTA創立10周年記念行事として秋津小学校に飼育小屋が寄贈された。お父さん達が中心にほとんどの土日を返上で小屋づくりに取り組み完成したものだ。建築設計士あり、建設家あり、木材屋ありと、地域のお父さん達が、「学校のため

子どもの社会力をどう育てるか



「ごろとしよ」の完成で、地域コミュニティとしての学校作りが一気に進んだ。

なら、「地域のためなら」という心根を持って取り組んだのである。毎回の作業後はきまっでの飲み会。そんな話し合いの中で、秋津の地域コミュニティの構想は熟していった。

鳥小屋に続いての「ごろとしよ」といわれるごろごろ図書室の構想もそんな飲み会の中から生まれた。余裕教室を手作りで改造が行われ、絵本を中心とした低学年用の本が集められ、床はカーペット敷きにした。完成後定例となった「学校おはなし会」は全市に広がった。

このような活動の中で、学校と地域はしだいに密接な関係を持つようになり、地域の人達も学校に入ってくるようになった。地域の人達も気軽に集える学校にということで、教育委員会の特段なる配慮のもと、学校内にコミュニティールームが作られた。ここでは、「合唱サークル」、「リコーダークラブ」、「オペレッタ劇団」などさまざまなサークルが立ち上がった。現在ではその運営も全て自分達で行っている。

3. 江戸の親子 ～父親が子どもを育てた時代 太田素子 中公新書 1994年



「燧袋」高知市民図書館所蔵

江戸時代の子育てと親子関係を一言でいうならば「父親が子どもを育てた時代」であろう。もちろん、江戸時代も育児の直接の担い手は母親は子守女、祖母などが多かったが、記録を書き残したのは男性が多く、世に「子育て書」と呼ばれる論は、男性が男性読者に向けて書かれたものが多い。その大きな理由は、家の継承を価値と考える時代

であったゆえに、子育てはいわば公けごとであり、女をよく教訓してよき子育てをさせること

が家の最高責任者たる男の責任とされていたためであろう。つまり、父親達は、家職継承のためには、自ら経験し体徳してきた、職業上および社交上の知恵を、そのまま息子に引き継ぐことが最良の教育だと、自身をもちやすかったのであろう。それはまた、家精度の由来する父親の子どもに対する教育責任が、ほとんど自己愛の延長として子育てに向かうような構えを父親達の間にも生み出していたのであろう。

この本では、化政期から天保初期に生きた土佐藩下級武士楠瀬大枝の日記「燧袋」をもとに江戸時代の間人模様について論じられている。



楠瀬大枝堂園(化政文人似顔 絵)高知市民図書館蔵

子どもの社会力をどう育てるか

「^{ひらぶくろ}燧袋」は、大江が34歳の春に書き始めて、亡くなる一か月前の6月まで、途中2年の欠落はあるが26年間にわたりほぼ連日つけられている。彼は結婚して、子供を儲けるが、女の子が続き、男の子が生まれなかった。そのためか妻はノイローゼになってしまい、ついには離婚の道をたどってしまう。そして、大江は再婚をし、やっと男児を儲ける。ところがその男児も幼くして病気で失ってしまう。当時は若くして子どもを失うことが現代と比べてあまりにも多く、大江の場合もその悲しみが切々とつづられている。